

# 星の王子さま（子ども）と宮崎駿を考える

～コミュニケーションの社会学から～

佐々木 隆\*

Think the Little Prince (the child) and the Hayao Miyazaki

From the sociology of communication

Takashi SASAKI\*

Key words : 社会	society
コミュニケーション	communication
子ども	child
星の王子さま	the Little Prince

## はじめに・子どもと大人のコミュニケーション

社会という言葉はソサイエティ (society) の訳語で、ラテン語のソキエタス (仲間) に由来する言葉です。社会の社という言葉は宗教的な集まりの意味から人が集まる。神様たちが集まってくるから神社です。会はフタと器がぴったり一致する意味で合うことから、人が会って集まって一つの組織になっているから会社です。人が集まるという意味の文字を二つ結び付けてできた言葉です。ばらばらな人と人を結びつけて意味のあるまとまりにしているのがコミュニケーションです。それは商売をするときの接待や交渉に必要な実用的な意味だけではなく、生きるために私たちが人間関係を成り立たせ成長してゆくために必要なものです。当然、保育園、幼稚園、子ども園、小学校においても重要な役割を果たしています。そして、社会全体の在り方を形成してゆくものともなっています。コミュニケーションが存在するかどうか、上手くできるようになるかどうか、考え方や生き方の問題として人生の早い時期から始まっています。

家族における親子のコミュニケーションは乳幼児から始まり、そして自立後にもなんらかの形で続いてゆきます。しかし、現実はずしも上手く

いっているものではありません。私たちのコミュニケーションの問題はこれまで家族の中で培われたもの、培われなかったもの全体の結果と言えます。現在の状態は個人の努力や怠慢などの結果だけではなく、個々の家族の事情や学校の師弟関係や同級生などそして社会の影響によるものです。しかし、それだけで決まるものではありません。人間が主体的に働かせる知・情・意によって決まる自由の余地もあるのです。

子どもと大人のコミュニケーションを考えてみたいと思います。ここでは子ども園などの施設などの観察ではなく、小さな子どもとのコミュニケーションがどのようなものか理解するために、深い洞察がなされているサンテグジュペリの『星の王子さま』を取り上げます。

この本を資料として読むのですが、作品や作者とは無関係に、都合の良い所だけ言葉の切れ端を、勝手に寄せ集めるのではなく、作者の生きた時代と、作品の文章の流れの中で、深く意味を味わい、内容を十分に把握しなければなりません。ここでは、『星の王子さま』の全27章の中の17章と18章を取り上げて考察します。

読むと言うことは、まずこの本を楽しむ味わうことです。登場人物と親しくなることは理解への近道となります。この本は世界中の言葉に翻訳され、日本でも多くの人に読まれ、影響を与えてき

---

\* 東北女子大学

ました。それはこの本の洞察の妥当性と普遍性の証と思われます。そして、その影響はこの本を読んだ人にも読んでいない人にもすでに及んでいるのです。

多くに人が聞いたり歌ったり演奏したことのある宮崎駿の作詞による『天空の城ラピュタ』のテーマソング『君をのせて』の「あの地平線、輝くのはどこかに君を隠しているから。たくさんの灯が懐かしいのは、あのどれか一つに君がいるから」という歌詞の部分は、『星の王子さま』24章の「空の星が美しいのは、目には見えない花が、どこかの星に咲いているから」「砂漠が美しいのは・・・砂漠のどこかに井戸を隠しているから」に由来するものと稲垣直樹が『『星の王子さま』物語』で指摘されています<sup>1</sup>。これは表面的なまねなどではなく、作品の内容に触発されて生まれてきたものです。零戦の設計家、堀越二郎の半生を描いたアニメ作品『風立ちぬ』は堀辰雄の小説『風立ちぬ』に触発されてできたと言われます。同じようにサンテグジュペリへの宮崎の深い共感と理解と敬意が表されています。子どもをよく観察している宮崎アニメの作品とも照らし合わせながら、読み解いて行きます。



これは王子さまと呼ばれる小さな男の子と砂漠に墜落した飛行機の飛行士であるボクとの出会いと別れの物語です。王子さまは自分の星を美しい花との間で起こったトラブルで逃げ出します。この鳥に紐を付けて飛んでいる絵のキャプションに逃げ出したと書いてあります。王さまの星、うぬぼれ屋の星、アルコール依存症の星、実務家の星、

ガス灯の点灯夫の星、地理学者の星と六つの星を遍歴して、地球へやってきます。



## 1 地球で最初にヘビと出会う

王子さまが地球に下りてくると、夜でした。あたりには人が見当たりません。誰も人がいないと思っていると、月の色をした輪のようなものが動きましたとあります。

「月の色」とはどんな色でしょう。英訳では金色とありました。太陽や月の色を表現するのも文化によって異なるのです。日本では日の丸に代表されるように太陽は赤いと言われますが、外国では黄色と認識されます。月についても違いがあるようですがよく分かりません。それでも月明かりに照らされて見えるどのような風景（環境）にいるか想像してみることが大切です。これはヘビが動いた時に月の光でウロコが光ったことを月の色と表現したと思われます。

「輪」のようなものとは、何でしょう。ヘビの胴体は円筒形で丸いかもしれませんが、それを輪のようになっているとは言いません。どの訳本にも輪のような物としかありません。ヘビの生態を考えて、細長いヘビが丸くとぐろを巻いていた状態になっていたと思われます。ヘビがとぐろを巻いているのは、突然現れた王子さまにヘビが警戒して防衛と同時に攻撃態勢にあったということです。それはヘビが長くのびた状態よりも攻撃的なので、星の王子さまの命は危険な状態にあったのです。しかし、ヘビは小さな男の子だったので安全であると気付いてとぐろをほどいたのです。こ

れがここでのコミュニケーションの前提とするための理解です。

## 2 王子さまとヘビの対話 ここはどこ

何かが動いて光ったことに気が付いた王子さまは、とりあえずヘビとは知らずヘビに声をかけます。ヘビも挨拶を返します。挨拶は一番簡単なコミュニケーションのきっかけです。だから、人間関係を形成するための端緒として挨拶は大切なもののなのです。

「月」とか「こんばんは」という言葉から、その時間が夜であることが分かります。夜か昼かで状況が変わります。王子さまには暗かったので月の色に光るまでヘビが見えなかったのも無理はないことが分かります。ヘビ自体が発光するわけではありませんから、光ったと言うことは月も出ていたことになります。辺りの景色も暗いとはいえ少しは見えていたことになります。

王子さまはヘビに、ほくが「落ちてきた・tomber」のは何という星だろうと尋ねます。tomberは落ちるとか倒れる、雨や雪が降ると言う意味で、降りるという意味ではありません。階段を降りるはdescendreという動詞を使います。ではいったいどんなふうにして地球へ落ちてきたのでしょうか。不思議なことにこの物語の中では何も書いてありません。初めの方に渡り鳥を使って移動したと思われると言う飛行士の推測があるだけです。なぜ、我々もここにいるのだろうと疑問に思う時、移動の手段ではなく、生きると言う意味において考えると、よく分からないまま「すでに投げ出されている」という当時の実存主義の考え方を認めないわけにはゆきません。それをここに落ちてきたと表現しているように思われます。王子さまは地球ということは目指していますが、夜の砂漠ということは選んでいないのです。

ヘビは、ここは地球のアフリカで、ここに人間がない理由は、ここが砂漠だから、地球は広いので他の場所に人間は住んでいるからだと答えます。環境と人間のかかわり（コミュニケーション）から暮らしが分かりそこに住む人々の社会も分

かってきます。社会を認識する時に町の中だけを考えるのではなく、風土を含めた町の外との包括的な関係まで考えなければなりません。

## 3 王子さまは自分の星を見つけた

王子さまは、話を止めて、空を見上げ、「星たちがキラキラ輝いているのは、みんなが、自分の星を見つけられる（retrouver）ためかな」とつぶやきます。ここで自分の星を見つけられるためかなというのは、実際の星よりも夢や理想を比喻であると思われます。英訳をみると「また見つけられるため」となって、ただ「見つけられる」ではなく「また」（again）が加えられています<sup>2</sup>。フランス語のtrouver（見つける）ではなくretrouverの「re」の再びの意味を意識して訳しています。ただ単に自分の星を見つけられると言うのではなく、自分のやって来た星を再び見つけられるかということになります。

これは忘れていた真実を思い出す「想起（アナムネーシス）」というプラトンが『メノン』という対話篇で示した考え方と似ています。生まれる前に人の魂（心）は真実のものの姿を見ているが、肉体を持って生まれる際にそれを忘れてしまうが、推理と吟味によってそれを思い出せるという神話的な仮説です。その例として、対話の中では幾何学を学んだことのない奴隷の少年が教えられることなく、ソクラテスのアドバイスだけで問題を解いてゆき、答えを見つけだします。この『メノン』の思想は道徳の教育や学習の可能性について考えるときによく参照されます。自分探しという言葉があります。多くは外へ出て行って、自分に合うものややりたい仕事やふさわしい相手を探します。それで外国などへも出かけて行ったりします。王子さまの旅も自分探しの旅に似ています。しかし、王子さまの含蓄のある言葉は自分自身を反省して、自分自身を発見することを意味しているようです。誤りを含む先入観で作られた自己のイメージを見直すために、自分自身について知っていると思っていたことを吟味するのです。『星の王子さま』はほとんど一対一の対話で構成

されています。見つけ直すということは、ただ思い込みや情報として知っていると思っていただけのことを吟味検討して、そこにある偏見や誤りそして無知な部分を自覚化し無知を無知として認めることになります。

王子さまはあの花のことが好きだったし、あの花のことを知っているつもりだった、けれども花のことを必ずしも十分に理解していなかったのです。花もまた王子さまのことが好きでしたが王子さまのことを良く理解していなかったのです。地理学者の所で「花は、はかない」ということを教えられて、王子さまは初めてあの花もはかないと言うことを理解したのです。花は若くてはかない命であるがゆえに、王子さまのことを思いやる時間もなく性急な要求をして、関係性を落着いて築けなかったように思われます。宮崎駿の『となりのトトロ』で病院にいるお母さんが退院して返ってくると聞くと5歳児のメイちゃんは「あした?」と言います。子どもは今とここを生きるので長い時間をイメージできないのだと思われまう。それで退院の日が延びたので時を待つということができずただ「いやだー」とわがまを言うしかなかったのです。

さらに、王子さまはヘビに「ぼくの星をごらんよ、ちょうど君とぼくの真上にある」と自分が来た星を指すのです。この「また見つけられる」という言葉でサンテグジュペリは、王子さまがもう二度と戻らないつもりで出てきたにもかかわらず、また自分の星に帰るかもしれないことを暗示させています。前の「retrouver」には再会するという意味もあります。

ヘビは王子さまの星を「美しい星だね Elle est belle.」と言います。ヘビの言い方はとても暗示的です。この美しいと訳された「ベル」という言葉には、素晴らしい、良いと言う意味もあります。「elle」を「それは」という指示代名詞で使っていますが、彼女という人称代名詞でもあります。この部分だけ切り取ると「彼女は美しい」「彼女は良い人だね」とも直訳できるのです。ヘビが、王子さまになぜ地球に来たのかと尋ねます。それ

は、どうしてあんな美しい星（良い星）から、こんな遠くの地球へまでわざわざやって来たか理解できなかったからです。



王子さまは「花と難しいことがあってね」と答えます。星も花も女性名詞なので、代名詞に直すと「彼女と難しいことがあってね」と読むことができます。ヘビは「ああ!」と言っただけでしたが、すべて分かったようです。恋愛というのはもっとも難しいコミュニケーションの一つだと思われまう。二人は沈黙してしまいます。沈黙とは何も話さないだけのことではありません。単に気まづくなって黙ったのではなく、話してはいけないことや微妙すぎて言葉では話しえないことなども含まれています。美というものが言葉では語りきれないものであるように、悩みや悲しみもまた言葉では言いきれないことをヘビは共感したのです。ヴィトゲンシュタインに「語り得ぬものについては、沈黙しなければいけない」という言葉があります。もし、大事なことを簡単に話すことができたなら、それは浅薄な意味にすり替えられてしまっているように思われまう。語り得ぬものを直観し、それを味わっている時間が沈黙だとも言えます。

王子さまはヘビに「人間たちはどこにいるの。砂漠はちょっとさびしいね」と言うと、ヘビは「人



間たちの間にいてもさびしいよ」と答えます。これもとても意味深長な言葉だと思われます。大きな都市、大きな孤独（Magna civitas, magna solitudo.）というラテン語の諺があります。大勢の人がいても、親しい人がいなければ孤独だと言う意味です。サンテグジュペリはアメリカに亡命して、ニューヨークでしばらく暮らしていましたが、そこにいたフランス人たちの中で政治的に二つに分かれたグループがあり、そのどちらにも属することのできなかったために、大きな孤独を味わったようです。

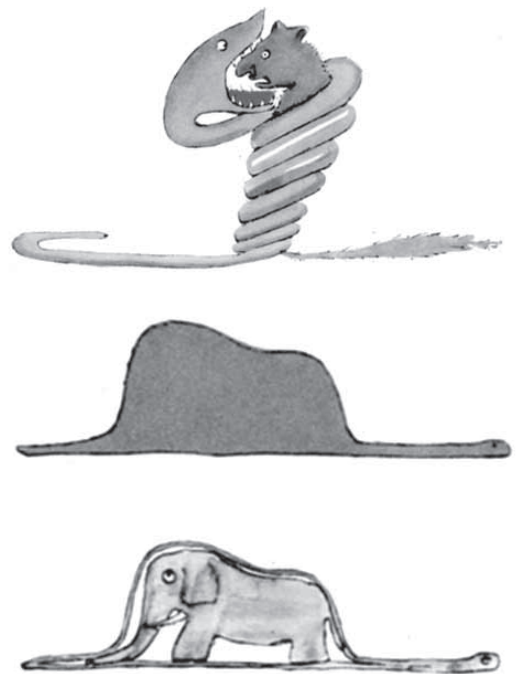
すると王子さまはヘビをじっと（longtemps・長い間）見つめました。王子さまは自分の星にいたときに花とかかわりを持って二人でいたけれど、さびしく一人でいた時よりも孤独になったことを思い出して、王子さまはヘビの言葉に同意して沈黙していたのではないかと思います。ここで王子さまは自分のことを思い出しただけではなく、相手であった花もまた孤独になったのではないかと思ったのではないのでしょうか。

資料を読むときは、字義通りに、経験的に、そしてそこには書かれていないことでも論理的に考えられうること、あえて書かなかったことなどすべて考えてみなければなりません。

#### 4 王子さまとヘビは死について話す

「君って、変な生き物だね」と、ようやく王子さまが言いました。「指みたいに、細くて……」と挿絵に付けられたキャプションに本文の言葉がそのまま使われています。王子さまの星が王子さまの頭の上で光っていて、その下で王子さまが石の所にいるヘビを見えています。「指みたいに、細くて」という言葉をさえぎって、ヘビは「おれは王様の指よりも強い」と応えます。王様の指とは何のことか良く分かりませんが、聖書（ルカ福音書11章20節）に、イエスが「神の指で悪霊を追い出した」という言葉があります。たぶん神は王にたとえられるので、神に準ずる王という言葉で、物や人を動かす強い力や権力を示しているのだと思われます。

王子さまの「君はそんなに強くないよ、脚がないじゃないか、君は旅をすることだってできない」ということに対して「おれはおまえを船で運ぶよりも遠くへ連れて行くことができる」これは物理的な移動ではなく、この世からあの世へ送ることの比喩で、死をもたらしことができるという意味です。



この『星の王子さま』のお話の第一章にあるケモノがボアというヘビに巻かれている一枚の絵とゾウがボアに呑み込まれている二枚の絵で始まっていることを思い出します。ヘビには死のイメージが伴うようです。

ボアの話は日常の中でゆっくりどうすることもできないまま死んでゆくことに対して、こちらは非日常的な場面で瞬間的に死んでしまうこととの違いがあります。ここで示されているのは、ただボアに消化され、死んで消えてしまうと言うのではなく、生まれてきたところである土にまた返ると言っていることです。土から生まれ土に戻るという考え方です。これは生きていること、有るこ

とがどれだけ難しいことなのか、「有ることが難しい」ので「有難い」と言われるようなものです。アリストテレスは存在するものはすべて存在する意味を持ち、何らかの意味で善であり、欠けていること、存在しないことが悪であると言っています。例えば、病気（悪）というものがあるのではなく、健康（善）が欠如していると考えなのです。だから、有難いことがあることは良いことになるのです。日本語でも悪い所を示すのに欠点（欠けたところ）と言うのと同じことです。

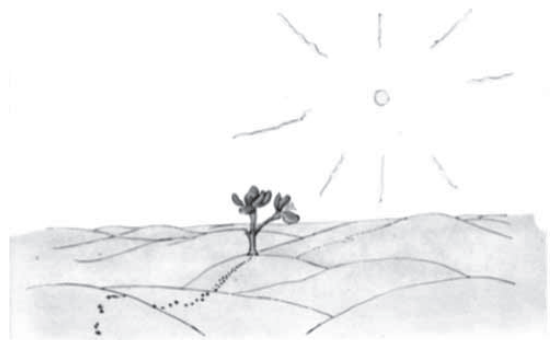
ヘビは王子さまのくるぶしに巻き付きます。しかし、王子さまを殺さず、生かしておきます。その理由が「お前が無邪気（純粋）で」「他の星からやってきた」「お前がか弱くて、憐れみをもよおさせるからだ」と言います。弱肉強食という考え方からすれば、王子さまの殺されない理由がか弱さであると言うことは興味深い所です。

ヘビの言葉に対して、王子さまは何も返事をしませんでした。王子さまの沈黙の後、土から生まれたものを土に帰すことのできるヘビは、王子さまに故郷の星に帰りたくなったらおれが帰してやろうと約束します。これはキリスト教圏では良く知られている旧約聖書の創世記における神が土から人間を作ったと言う神話を基にしています。王子さまもそれがどんなことか十分に理解しているのです。だから、ここは「もう十分わかったよ」と言ったと思われます。それに対して、王子さまが分かっていることを言われているのでイライラして、こう言うのだと加藤晴久は指摘されています。しかし、少し前に王子さまが笑っている文脈の流れからは、死の意味の重さを考えてのことであって必ずしもイライラしていると解釈する必要は無いようにも思われます。

分かったと言った次に、どうしてヘビが謎めいた言い方をするのかと尋ねます。これはヘビの謎めかした語り方にイライラしていたのかもしれませんが。すると、ヘビは「おれがすべての謎を解くからだ」と応えます。この応えは王子さまの質問に必ずしも対応していません。応えもまた謎のようです。ただ、謎を解くのは賢いことを意味しま

す。新約聖書にも「ヘビのように賢く、鳩のように純粋に」マタイ10章16節という一節があります。ヘビは賢さを、王子さまは純粋さを、象徴しているようです。旧約聖書・創世記でアダムとイブが蛇にだまされて、神に食べることを禁じられた「禁断の木の実」を食べてしまい、その結果、知恵を得ますが、この世に死を導き入れてしまいます。死とは何でしょう。知恵とは何でしょう。答えられるものではありません。だから、二人は黙ったのではないのでしょうか。

## 5 飾り気のない花との出会い、人間は根がないので不自由



この絵は王子さまが、花の咲いている方へ真っ直ぐに進み、そのまま向こうへ行ったり、逆に向こうからこちらへ来た絵です。この太陽は、朝日か夕日かどちらでしょう。朝日なら夜明けとともに西に歩きだし、夕日ならば王子さまが西へ向かって行ったことになります。

花びらが三つだけで他に何も無い花に出会います。「今日は」と王子さまが声を掛けると「今日は」と返事をしてくれました。王子さまは人がどこにいるのかと尋ねます。花はキャラバンの通ったのを見たことがありました。それで人は6人か7人ぐらいいらいると思うと答えます。しかし、どこにいるのか誰も知らないと思うと言います。人は風に吹かれるままに動いているだけ、「根がないから苦勞する(se + gêner)でしょうね」と言います。この苦勞するという言葉には不自由窮屈な思いをするという意味があります。人間はどこへでも動

けることが自由だと思い込んでいるけれど、そうではないという批判です。これは飛行士で世界中を遠くまで飛びまわっていたサンテグジュペリがこれを書いているのです。逆に、動かないことが不自由だということでは必ずしもないということです。それどころか、生きる意味という根を持つことが求められているのです。死を暗示するヘビの話の次に、シンプルに一人でも生きている花の話があるのは対比する意味があるのです。

この花を何のとりえもないつまらない花と考えるか、極めてシンプルな生き方に満足しているかと考えるかで意味が違ってきます。前者ならば、王子さまにとって魅力がなかったので、友だちになることもなく去ったことになります。後者ならば、それは媚びを売ることも（コケット）、誰かに依存することもなく、一人だけで生きて行く生き方です。

しかし、自分の生き方や他人の生き方への共感とコミュニケーションをもつことがないので、愛や友情そして楽しさや面白みも生まれてこないのだと思われます。だから、王子さまは花に「さよなら」を言い、花も王子さまに「さよなら」を言うのだと思われます。これは前のヘビとは「こんばんは」と言っても「さようなら」を言っていないことと対比されるところです。

## 結論 コミュニケーションの困難における驚きと学問の始まり

アリストテレスは驚きが学問の始まりであるといっています<sup>3</sup>。私たちは通常の言葉で上手くコミュニケーションされている間は何も問題なく、疑問もなく、我々は何も考えません。しかし、どこかでそれが円滑に行かなくなり、人間関係が断絶したり、思いがけない答えが返ってきたりして憤慨したり、驚かされると、これはいったい何だろうかと考え始めます。

子どもとの困難なコミュニケーションを受容し共感するようにしつつ、状況、子どもの身体、子どもの表情、子どもの言い方、話していることの内容、大人である自分自身の態度を含め、吟味検

討しコミュニケーションすることが、大人の考え、理解し、知ることの始まりなのです。

子どもの頃は何でも新鮮で不思議で驚きに満ちていました。観察していると子どもたちは様々なことに驚いています。なぜ、なぜ、と王子さまのように尋ねまわります。しかし、大人になるにしたがって、驚きは色あせ、何でもないこと、算数・文法・歴史・地理などの形式的なあるいは暗記を中心とする科目に分類され、その枠の中だけで説明されていると思い込んでしまいます。驚きは失われ、役に立つこと既知のことによって変わってしまのです。誰かが答えを知っていると思い、自分では考えずネットに探すことになります。通常の大人のコミュニケーションができなくなった時、理解の欠如態において初めてそれに気が付くことができるのです。

サンテグジュペリは戦争という死と直面した危機的な状況の中で、あえて児童文学という方法を選び、大人たちの忘れていることを、幼児期という根源にもどって、大切なことを想起させようとしたのです。

人間は共同しなければ生きられない存在なのですが、共働して深くコミュニケーションすることがないから孤独になってしまうのです。だからこそ深いコミュニケーションを持たなければいけないのです。サハラ砂漠に飛行機が墜落し、水が無くなってきて命に係わる状況にあることは、戦争で命に係わる状況を暗示しているのです。

王子さまはマルティン・ブーバーの言葉でいえば、「我とそれ」という人間が人間としての人間関係ではなく、物と物の物関係になるような関係に囚われていることを指摘しているのです。そんな我々の我を汝へと向き直させ「我と汝」の関係を結ばせ、大人に忘れている人間の核となる人間性（魂又は心）を取り戻させようとしていると思われます。サンテグジュペリは大人を大きな人、子どもを小さな人と呼びますが、それは人としての魂又は心を共通に有しているという認識を持っているからで、そこに対話の可能性の基礎があるからです。

魂（プネウマ）の存在の暗示は挿絵の中に王子さまのマフラーは風がなさそうなのに何度も翻って描かれ風（プネウマ）の存在が示されています。地球に下りた時、マフラーが下にたれているのは間違ったところへ降りてしまったのかとがっかりしているからではないでしょうか。宮崎駿の引用したポール・ヴァレリーの詩の堀辰雄訳の言葉「風立ちぬ、いざ生きめやも」の意味は、風は命や魂の動きを意味し、さあ生きようと言う意味です。風のように「思うままに吹いてくる」（ヨハネ福音書3章8節）目には見えない自由で永遠なるものです。王子さまが最後にあのヘビにかまれて倒れて行く時に、風（命・魂）を暗示するマフラーがなくなります。それは魂がすでに星に向かって飛び立って身体から離れているからです。王子さまの魂は星へ帰っただけではなく、私たちの所へ来ていて、本当に私たちが子どもたちに耳を傾ければ王子さまの声が聞こえてくるかもしれません。

## 注

- 1 稲垣直樹『「星の王子さま」物語』p257
- 2 Katherine Woods, translated『The little Prince』p70
- 3 アリストテレス『形而上学』出隆訳  
岩波書店2刷（1977）「驚異することによって人間は、今日でもそうであるがあの最初の場合にもあのように、知恵を愛求し〔哲学し〕始めたのである」p10

## 原著・翻訳・参考文献

Antoine de Saint-Exupery Le Petit Prince  
(1943) Hachette, Brace & World, Inc, New York

The little Prince, translated by Katherine Woods  
Penguin Books (1962)

内藤濯 訳『星の王子さま』岩波書店（1966）

池澤夏樹 訳『星の王子さま』集英社（2005）

河野万里子 訳『星の王子さま』新潮社（2006）

谷川かおる 訳『星の王子さま』ポプラ社（2006）

野崎歓 訳『ちいさな王子』光文社（2006）

稲垣直樹 訳『星の王子さま』平凡社（2006）

大久保ゆう 訳 [http://www.aozora.gr.jp/cards/001265/files/46817\\_24670.html](http://www.aozora.gr.jp/cards/001265/files/46817_24670.html)（2006）

稲垣直樹『サン＝テグジュペリ 人と思ふ』清水書院（1992）

稲垣直樹『星の王子さま』物語 平凡社（2011）

片木智年『星の王子さま学』慶應義塾大学出版会（2005）

加藤晴久『自分で訳す「星の王子さま」』三修社（2006）

加藤晴久『憂い顔の王子さま』書肆心水（2007）

小島俊明『おとなのための星の王子さま』（2000）

藤田尊潮『「星の王子さま」を読む』八坂書房（2005）

柳沢淑枝『こころで読む「星の王子さま」』成甲書房（2000）

三野博司『「星の王子さま」事典 大修館（2010）

ロゴポート編『星の王子さま フランス語辞典』

The Japan Times（2015）

RenardBleu『「星の王子さま」総覧』Available online at [www.lepetitprince.net](http://www.lepetitprince.net)（2015）

佐々木隆『「宮崎アニメ」秘められたメッセージ』ベスト新書（2005）

佐々木隆『謎解き！宮崎・ジブリアニメ』ベスト新書（2010）